

■ 編集だより

編集後記

この原稿を書いている年末は、いつものようにメディアで1年を振り返る記事やコンテンツが目立ち、1年の流れをますます速く感じさせられる。しかし、そうした慌しさを別にしても、時の流れがますます速まっているように感じられる。複数の人から、「時の流れの感じ方には現在の年齢が関係し、これまでの体験数が多いほど、新しいことが印象に残りにくくなるため、という俗説がある」と聞いたことがある。真偽は定かでないが、蓄積した経験の記憶容量が大きいほど、新たなことが覚えにくいということだろうか。もしこの説が正しければ、記憶力の低下も時間の感じ方に影響するはずだ。実際、最近の仕事の場面でお会いした方について、それ以外の属性はすぐに頭に浮かぶのに、肝心のお名前が出てこず失礼するをしばしば経験するようになった。このように加齢に伴う記憶容量のはっきりした減少を痛感しているだけに、紹介した説には説得力がある。しかし、加齢性変化の問題を否認するわけではないが、個人的には、時間の感じ方を記憶容量の問題だけで説明することは難しいようにも思う。たとえば、体験に対する注意の向け方や集中の程度、さらにはその時間で得られた達成感といった主観的な価値指標の影響もかなり大きいのではないだろうか。てこずっている患者さんの治療、興味をもって行っている研究など、動機付けをもってエネルギーを傾注できる体験の場合、その最中という短時間のスパンでは、時の経過が速いというか、それをほとんど意識さえしない。それでも、その後で充実感を感じることができれば、そこで使われた時間を肯定的に受け止めることができるので、そうした時間は密度が高いものとして認識されるのだろう。

もう1つ、テクノロジーの進歩にも時間感覚は影響を受けているように思う。一番身近な例はもちろんパソコン。CPUの処理速度が一昔前のスパコン並みに速くなり、単位時間にできることが増えてしまった。その結果、作業能率の向上が無意識に刷り込まれる。しかし、振り返って考えると、パソコンに任せられるのは、柔軟だが処理速度ではパソコンにはるかに劣るヒトの脳が作り出した思考や苦勞して得たデータを基にした処理の部分である。実際に原稿作成をスピードアップしようとすれば、タイピングではなく文章を考える時間を加速させないといけないが、現実には難しい。作業能率向上を求める圧力に負けると、結果として速い時間の流れについていけない駄目な自分という否定的な認識に捉われ、より一層、時の流れを速く感じるようになるような気がする。

こんなことを考えることが多くなった時、若手と続けている早朝の輪読会でヤスパースの精神病理学原論(もちろん西丸四方先生の訳書)に挑戦することになった。若手自身の希望によるものだが、彼らが普段手にしている成書の多くが解り易い解説本であることを考えるとかなり意外な選択であった。研修医時代に挑戦し、数十ページの緒言で投げ出した著作であるため、一番緊張しているのは自分自身かもしれない。しかし、単語、文節を疎かにせずに読み進めるべき古典には、知識を効率よく得る解説本とは異なる役割があるだろう。彼らにとってはやや固く感じられると思われるその表現から、精神医学の血肉となるであろう内容を感じ取ってくれることを期待したい。そして、自分自身の時間に関する不全感を癒してくれるアンチテーゼとしてもじっくりと楽しんでみたい。

兼子幸一